Osaka University Knowledge Archive

Title	近代日本への新国家構想
Author(s)	Isam, Mohamed Reyad Hamza
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37821
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 3 】

氏名・（本籍）	Isam Mohamed Reyad Hamza（イサム モハメド レヤド ハムザ）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	第　9785　号
学位授与の日付	平成3年5月2日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文名	**近代日本への新国家構想**
論文審査委員	（主査）教授　子安　宣邦 （副査）教授　廣田　昌希　教授　芝原　拓自

論文内容の要旨

本論文は，日本の近代国家形成の前提となる，江戸末期から明治初頭にかけての変革期におけるさまざまな思想運動を，そこに提示されている国家構想という観点から考察するものである。幕末の「内憂外患」といわれる危機に際して，思想的立場を異にするさまざまな改革論が主張された。そこには近代日本への可能性としての幾つかの国家構想が提示されている。明治国家が最終的に選択した近代天皇制国家の体制とそれを支える思想的基盤を理解するためには，その前提となった幕末変革期を通じて提示された多様な国家構想を検討しなければならない。

本論文は以上の問題関心にもとづいて，国学，水戸学，そして横井小楠の実学という，江戸末期から明治初頭にかけて強い影響力をもち，また際だった特質を有する三者の思想と，そこにおける国家構想を解明しようとするものである。

第一章国学的国家構想－理想と挫折－

本章では，国学における国家構想の解明を課題として，主として文学的研究として出発した国学が，平田篤胤を経て，幕末維新期に強力な政治思想として展開されるに至るまでの過程を視野のうちに入れて考察されている。筆者は，宣長国学から篤胤国学への変容を，顕幽二世界における価値規準の一元化，あるいは神の世界に関係づけられた人の世界への積極的な視点の成立にとらえている。そしてそこに篤胤国学が現実社会に積極的に対応して，みずからを政治思想，社会思想として展関させる基盤があると見ている。神との祭祀を通じての服従関係によって，現実社会の支配・服従関係を再編成し，また神の意志の実現として，あるいは神の業の再現として現実の社会的行為を意味づけ直すことによって国学は，国家社会の再構成の議論を展開する。本章ではそうした議論が鈴木重胤，桂誉重，生田万らによって検討される。その際，産霊という生産，生殖にかかわる概念の重視に，筆者は国学的言説の共同体的な契機をとらえる。そして神祖－天皇－統治者というヒエラルキーにもとづく支配

の原理と上述の共同体的契機とのさまざまな相関のあり方のうちに，社会の再構成論のそれぞれの位相を筆者はとらえようとする。筆者は鈴木重胤の「修理固成」の説や産霊の説に，篤胤国学の良質な継承と展開を見るが，その重胤によって現実の政治体制を相対化してしまうような国家構想が提示されていることに筆者は注目している。だが維新期に最後に到達した国学の国家構想は，産霊の神や氏神などの共同体的契機を欠落させた祭政一致の国体論として提出される。矢野玄道は，天皇による天つ神・天照皇大神への祭祀が国家統合の原理であると説く。こうした矢野らによって主張された神道国教化の構想は，明治政府のとる政治コースのなかで挫折する。神道を政治の原理としようとする彼らの構想は，神道を国家の政治目的に従属させる国家神道の確立によって挫折せしめられることを述べて本章は閉じられる。

第二章水戸学における国家構想－危機と国体－

本章では，幕末における国内外の危機に直面して，藩およびそれをこえた国家体制の改革の議論を展開した後期水戸学の思想とそこにおける国家構想が検討されている。後期水戸学を形成する三人の代表者，すなわち藤田幽谷，会沢正志斎，そして藤田東湖の三人がそれぞれに国内外の危機に直面して展開する国家経綸の議論が順次検討される。幽谷は，修身を基礎として治国平天下の課題を達成するという儒家の経世の論理の重点を転換させ，治国平天下の課題に正面することなくして修身はないといい，政治的危機に対処しうる実用の学としての水戸学の骨格を形成した。さらに本章では，幽谷の正名論と会沢の大義論の注目すべき特質について述べられ，そして水戸学の国家観は，会沢によってはっきりと示されることが述べられる。会沢において，「国体」は，万世一系の天皇に基づくものであるが，その国体を保持していくのは幕府の役目であるという二重国家の構想をもって示されている。ここで天皇による祭祀や「天祖」の概念が重視されても，それらは国学におけるような国家形成の理念としてではなく，国民統合上に必要な政治的な意味においてである。政治的主体はあくまで幕府であり，幕府が政治的手段として天皇をも利用しうる主体となりうるように改革されねばならないのである。この会沢による天皇の国民統合上の政治的意味づけは，東湖の「忠孝一本」の思想とともに，明治以降の近代国家の形成に，長い射程をもって影響を与えたものであったと本章は結論づけている。

第三章横井小楠における新国家構想－道義的近代国家－

本章では，松平慶永の政治顧問として幕末における国家の経綸に関わりをもった横井小楠の思想，その実学思想を通じて形成された道義的な国家の理想について考察される。小楠も実践的な経綸の学としての水戸学に共鳴したものの一人であるが，小楠の実学を水戸学から分かつ重要な点は，それが「三代の道」という儒家の道義的理想を高く指標としてかかげ，あるいは「天地公共の道理」という普遍的道理を基礎とした実践的な経綸の学だという点にある。この「天地公共の道理」を指標とする小楠の学は，尊王攘夷論につきまとう閉鎖性を破る開明性を備えたものであると筆者は述べている。本章で筆者は小楠の実学の分析にことに力を注いでいる。「格物と申すは天下の理を究ることにて即思の用にて候」と小楠がいう，独自なこの「思ひ」という概念を分析して，筆者は，我が「思ひ」を経

由させるという主観化の作業を通じて，客観的世界を実践的世界に組み替えようとすることだと重要な指摘をしている。この「思ひ」を基礎にした小楠の実学のあり方を，肥後藩における改革運動を通じて，また松平慶永の政治顧問として幕政に関わる活動を通じて筆者は検討し，そしてそこにどのような国家構想がもたれているかを明らかにしようとする。小楠は儒家の伝統における仁を，「利用厚生」の仁として実践的なレベルにとらえかえし，新たな国家を仁政を核として形成しようとしていると筆者は説く。「利を以て人に及ぼす」という「仁の用」を重視する小楠は，すでに富国を実現している欧米諸国のうちに「三代の道」に符合する体制のあることを見出していた。こうした仁政の実行を求める小楠の論理は，幕藩体制の解体をもたらすものだが，しかしそれは倒幕論と結びつくものではなかったと筆者は述べている。『国是七論』に見られるように，新たな政治体制への幕府の根本的な転換を小楠ははかっていた。小楠は明治二年に凶刃によって倒れるが，仁政の理念を核とした，民本主義的な国家のあり方を，内発的な必然性をもって小楠が構想しえたのは，彼の実学観にあったことが述べられて本章は結ばれている。

論文審査の結果の要旨

本論文の筆者はエジプト・カイロ大学の出身者である。１９３２年の独立まで苦難の道をたどり，その後現在にいたるまで近代国家形成に大きな力を注ぐエジプト出身の研究者である筆者が，日本の幕末維新の変革期に提示された，近代日本への国家構想に関心をよせたのは十分に理解しうることである。本論文はこの筆者の問題関心にもとづいて，徳川時代末期から明治初頭にかけて強い影響力をもち，また際立った特質を有する三つの異なった思想的立場からする近代日本への国家構想の諸相を考察したものである。国学，後期水戸学そして横井小楠の実学という三者の思想活動を通じて提示された国家構想を，それぞれの形成過程の分析を通じて考察する本論文の視角は独自的であり，本論文にかけた筆者の意欲をもまって，ここにすぐれた成果を生み出しえている。

古典文学の研究をもって始まった国学が，宣長から篤胤を経て，幕末における政治的言説へと展開する複雑にして多様な過程を通観することは決して容易なことではない。本論文は国学的立場からする社会像そして国家像の形成に焦点を当てながら，幕末にいたる国学的言説の多様な展開を考察するという困難な課題に果敢に取り組み，よくその課題への回答を出しえている。その際，顕幽両世界の関係のあり方から，宣長国学から篤胤国学への展開を分析した視点，また神祖－天皇に連なる垂直的支配の原理と産霊の概念を核とする共同体的原理との相互交渉なり相関のうちに幕末国学の提出する社会像，国家像の位相をとらえようとする視点は，国学的思想活動についてのすぐれた分析的な視点である。この視点からする考察は，十分説得的な成果をもたらしている。

さらに第二章について見れば，しばしば後期水戸学についての研究が，会沢安の『新論』と藤田東湖の『弘道館記述義』をめぐる考察に終始しているのに対し，本論文は藤田幽谷から会沢そして東湖へと，それぞれが個別に負う政治的課題とそれへの思想的対応のあり方をよく追跡し，そこから危機

の思想としての水戸学の提示する国家像へのすぐれた分析を可能ならしめている。ことに幽谷の王覇をめぐる正名論の分析，すなわち「王にして覇」「覇にして王」という二なるあり方を「王道を行ふ」という実効において統一しようとする論であるとする分析は，会沢における君臣論の分析とともにすぐれたものであり，第二章の水戸学についての考察を意味あるものにしている。

第三章は横井小楠の実学とそれにもとづく道義的国家の構想について考察されているが，小楠ほ筆者の大学院での研究対象であったものであり，小楠の実学の意義の解明にかけた筆者の意欲によって，本章は国学，水戸学という学派の解明に当てられた先行する章と十分に釣り合う重さをもったものになっている。小楠の実学，すなわち歴史的状況に正面しながら，経世致用の学という課題に積極的に応えようとするあり方については，すでに研究者による考察はなされている。しかし「思ひ」の働きを介して，対象的世界を己れにとっての実践的世界へと組み替えていく，小楠の実学を構成する動的な主体の意識のあり方は十分に明らかにされていない。本論文が，小楠の実学を構成する如上の動的な主体の意識のあり方を指摘し，さらに幕末の内外の政治的課題に実学的立場から小楠がいかに対応し，いかに道義的な国家の構想を抱くにいたったかを解明したことは，その国家構想の近代性についてやや過大な読みを伴ってはいるが，しかし小楠研究上その解明は高く評価しうるものである。

以上のように本論文が，各章において注目すべき分析視点をもってそれぞれの思想の展開を分析し，複雑な幕末の政治状況への対応を検討しながら，そこに提示された国家構想への考察を加えていったことは，本論文の成果として十分に評価しうるものである。だがことに第一章における国学についていえば，国学における国家構想という課題の大きさに比して，筆者の研究上の考察の及びえた範囲は限られている。もちろんそのことは，本論文が新たな資料を博捜して新しい視点を設定するというよりは，所与の文献の新たな分析視点からの解読によって問題を構成するという方法的立場に立っていることにかかわるものではあるが，視線の及びえた範囲のせまさはやはり批判点として明記されなければならない。また本論文は国学，水戸学そして小楠の実学における国家構想のそれぞれについて，すでに述べたようなすぐれた分析視点から考察をなしているが，しかし本論文が，幕末の政治状況のなかで提出されるさまざまな国家構想間の相克，葛藤をめぐる包括的な視点からの叙述をもって結ばれたら，本論文はいっそう完結した姿を呈したであろう。このことは，水戸学等のイデオロギー上の影響を近代日本の現実の国家形成の中でさらに検討すべきこととともに，本論文の成果の上に筆者が今後果すべき課題である。

本論文は，筆者になお残されている課題はあるが，幕末の諸思想においてもたらされた近代日本への国家構想を考察するという困難な課題を，すぐれた分析視点からの考察をもって十分な形で果しえている。国学，水戸学そして小楠の実学という三者の思想活動を，国家構想という視点から検討して，対置して示すという筆者の観点は独自のものであり，本論文は日本の近世から近代への思想史研究上にすぐれた寄与と問題提起をなすものである。本論文が文学博士（論文）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。